

書評

●岩田健太郎(亀田総合病院総合診療・感染症科部長)

内科レジデントの鉄則



編集：聖路加国際病院内科
チーフレジデント

B5 頁244 2006年
定価3,780円(本体3,600円+税5%)
[ISBN 4-260-00241-4]医学書院刊

五感が、記憶を呼び覚ますことがある。試験勉強時に聴きまくった音楽を耳にすると当時の苦痛がじわりとよみがえる。可愛かったあの子と同じ香水の匂いに遭遇すると、ほろ苦い思い出が(かなりビターな思い出が)蘇る。

『内科レジデントの鉄則』を開いた私を刺激したのは視覚ではない。聴覚であった。少なくとも私は、そう感じた。上級医の鋭いあの声(まあ、たいていは怒鳴り声)がよみがえる。「出血性ショックはバイタルサインだ(CBCではない)」「Wheeze＝喘息ではない」「頻脈だからといって、やみくもにrate controlをしてはいけない」「心筋梗塞の診断を、トロポニンに頼ってはいけない」「アンモニア＝肝性脳症ではない」「麻痺があるからといって脳梗塞とは限らない」……

雲より高いところに鎮座する偉い指導医のくだ

くどした説教やレクチャーよりも、頭よりも体、ひたすら走り回る研修医には、年の近い先輩の、こういう箴言こそがなによりありがたい。

経験(そのいくばくかは、おそらく苦い失敗譚)の積み重ねから生まれた数々の箴言。歴史の長い教育病院には必ずこういう言葉たちが蓄積される。本書を読むと、初期研究医のあの喧噪の日々がよみがえる。

3年目のチーフレジデントが初期研修医教育のために作ったこのテキストは、自らの経験と伝統から受け継がれたアフォリズムに満ちている。これだけは知っておいてほしいという強い願いや愛情が込められている。さすがは聖路加のチーフだけあってよく勉強もしている。「なぜFENaがよいのか」の項などは、とても参考になった。

研修医が研修医を教える。屋根瓦方式の最も美しい部分を氷結させたのが本書である。その点において、数多い「研修医マニュアル」のエピゴーネンからは決別している。本書を読んだ初期研修医は、新たな先輩医師を得た思いで熟読するとよい。本書を読んだシニアレジデントは、「おれもがんばらにゃ」と魂を鼓舞されるといい。そして指導医は、郷愁に浸りながら読むもよし、黄昏れるにはまだ早いと自らにむち打つのも、またよいであろう。